

### 英領マラヤ/マレーシアの労働者をめぐる一 考察

吉村, 真子 / ヨシムラ, マコ / YOSHIMURA, Mako

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences

(巻 / Volume)

50

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

65

(終了ページ / End Page)

77

(発行年 / Year)

2004-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015295>

# 英領マラヤ／マレーシアの労働者をめぐる一考察<sup>1)</sup>

吉村真子

- 1 はじめに
- 2 マルティ・エスニック社会マレーシアの移住労働者の歴史
- 3 エスニシティ，ジェンダー，ナショナルリティ
- 4 「労働者」としての考察
- 5 「自由な賃労働」
- 6 ジェンダーと「作業」
- 7 おわりに：歴史の捉え直しの試み

## 1 はじめに

マレーシアは、英領マラヤ時代に錫産業・ゴム産業が発展し、それぞれの労働力として、中国人、インド人が導入され、マルティ・エスニック（多民族、多民族）社会の構造が形成された。英領植民地時代に形成された「農村部のマレー系、鉱山労働者と商工業の中国系、ゴム農園労働者のインド系」という図式は1957年の独立後も変わることはなく、エスニック分業ともいべき就業構造は、エスニック集団間の所得格差を生み出すとともに、マレーシアの労働市場の大きな特徴となった。

しかし1970年代以降の新経済政策の下で、工業化が進められると同時に、ブミプトラ（マレー系優先）政策によってマレー系の商工業といった近代部門での雇用が進められ、エスニック分業の構造は変化し、また1980年代以降の労働力不足から外国人労働者が導入され、新たな構造が形成されている。

従来階級や労働をめぐる議論において、マレーシア／マラヤにおける賃労働者の形成は、英領植民地時代の錫鉱山の中国人労働者やゴム・エステート（大規模経営の農園，プランテーション）のインド人労働者、もしくは1970年代以降の工業部門におけるマレー系労働者の議論が中心的なものであった。また資本・賃労働という議論も、比較的、古典的な図式が多かった。しかし、1980年代以降の労働や歴史をめぐる議論の中で、そうした捉え方も見直すべき状況になっている。

筆者は、従来からエスニシティ、ジェンダー、ナショナリティをキーワードとして、マレーシアの経済発展と労働力構造を議論してきたが、本稿では、そうした視角を構造的にもちつつ、マラヤ・マレーシアの労働および労働者についての考察を試みたい<sup>2)</sup>。

## 2 マルティ・エスニック社会マレーシアの移住労働者の歴史

マレーシアは、マレー（ムラユ）系、華人（中国系）、インド系、その他からなるマルティ・エスニック（多民族、多民族）社会である<sup>3)</sup>。それぞれのエスニック・コミュニティは、言語（ムラユ語、華語および中国語方言、タミル語、英語など）、宗教（イスラーム教、仏教、ヒンズー教、キリスト教など）、文化、生活習慣などでそれぞれ異なった特徴を持っている<sup>4)</sup>。

1970年代以降、急速な経済成長を遂げてきたマレーシアは、1980年代以降、深刻な労働力不足に直面し、さまざまな部門で外国人労働力への依存が問題とされるようになった。とくに建設業、プランテーション（エステート）業、一部の製造業、家事サービス業など、相対的に賃金が低く、労働条件も悪い（いわゆる「3K（きつい、汚い、危険）」的）不熟練労働の業種・職種において労働力不足が集中し、マレーシア政府は1988年から「不法就労」の外国人労働者の雇用登録を進めてきた<sup>5)</sup>。そして1997年の経済危機を経て、外国人の「不法滞在」や「不法就労」についての取締りや送還が強化されたが、外国人労働力に依存する構造は変わっていない<sup>6)</sup>。

しかしながら、現在、マレーシア人として暮している華人やインド系住民も、そもそもはそのほとんどが19世紀以降、外国人労働者として流入してきた人々である。

錫産業は1840-90年代に中国人資本家によってマレー半島の西海岸を中心に発展し、その鉱山労働者として中国人クーリー（苦力）が連れてこられ、ゴム産業は1909-11年の「ゴム・ブーム」ともいべきゴム・プランテーション（エステート）への投資が急増し、イギリスの資本家によってプランテーションが開かれ、その労働者として英領植民地のインドからインド人（おもに南部のタミル人）が導入されている。そして現在のマレーシアの外国人労働者に依存する状況は、マレーシアの労働力流入の歴史においてさらに新たな段階に差し掛かっていると理解できる。

英領マラヤおよびマレーシアの歴史において、移住労働者は「労働者」として、「近隣の住民」として、そして「部外者」として、その受け入れ社会（地域社会）

につねに大きなインパクトをもたらしてきた。

現在のマレーシアの外国人労働者の大多数はインドネシア人である。インドネシア人は隣人として、過去数世紀にわたり、同じマレー世界の地域内を自由に行き来してきた歴史を持つが、現在は国境の設定によって「不法入国」、「不法滞在」、「不法就労」として分類されることになる。他方、華人やインド系は、歴史的には東南アジアのマレー世界の枠の外から来ているが、現在はマレーシア国民として地域社会に存在している。

こうした英領マラヤおよびマレーシアにおける移住労働者の位置づけを踏まえた上で、英領マラヤにおける移住労働者の導入の過程を、現在のマルチ・エスニック社会の形成の起源として、またアジア地域の国際労働力移動のケースとして分析することが、筆者が現在進めている研究の大きな目的である。その際、当時の中国やインドからの労働力の流出とマラヤにおける受け入れの意味だけでなく、当時のマラヤ社会における外国人労働者の流入のインパクトはどんなものであったのか、という視点も重要である。

### 3 エスニシティ、ジェンダー、ナショナリティ

マレーシアの労働市場を分析する上で、筆者自身がキーワードとしているのは「エスニシティ、ジェンダー、ナショナリティ」である。

すなわち、イギリス植民地時代に形成された「農村部の小農のマレー人、錫鉱山の労働者や都市部の商工業部門の中国人、ゴム・プランテーション（エステート）の労働者のインド人」といったエスニック（民族、種族）集団による分業の構造は、1957年の独立以降も本質的に変わらず、マレー系と華人との経済格差に対する不満を背景として、1969年に「5月13日事件」が起きた。新経済政策は、同事件をきっかけとして打ち出された政策であり、マレー系と華人の間の所得格差を是正するために、資本と雇用を中心にブミプトラ（マレー系）優先を進め、工業化を牽引力とする経済成長の中でマレー系を商工業部門に引き入れて平均所得を引き上げようとするものである。この新経済政策による工業化と公的部門の拡大の中で、おもに農業に従事していたマレー系は近代的部門に移動し、労働力構造におけるエスニック分業は少しずつ変化していった。

またこうした経済発展の中で、女性の賃金雇用への参加も奨励され、とくにマレー系優先とあいまって、従来は農村にいたマレー系の若年女性が、1970年代以降、急速に拡大していった輸出指向型工業の労働集約的工程の労働者として、製造業部

門に大量に流入していった。そして経済発展の中で深刻化していった労働力不足への対応に外国人労働者が雇用されていったことは、すでに触れたとおりである。

#### 4 「労働者」としての考察

英領植民地時代の労働市場の分析として、とくにエスニシティやナショナルリティからいうならば、当時マレー人が錫鉱山やゴム・プランテーションの労働者にならなかったことの意味、錫鉱山に中国人資本家が中国人クーリーを連れてきたことの意味、またイギリス植民地統治下でイギリス資本がインド人を労働者として連れてくることの意味などが重要となってくる。

##### (1) マレー系

まず原住民であるマレー人が錫鉱山やゴムのプランテーションの労働者とならなかったのは、単純に言えば、そうした労働者の労働条件が悪く、しかも彼らにはゴム小農など換金作物にアクセスする手段があったためと筆者は考えている。

ほかの植民地のプランテーション作物に比べて、マラヤのゴムについては、生産に占める小農の割合がかなり高いのが特徴である。作物としてのゴムは、それほど樹の維持には手間がかからず、手作業でタッピングを行い、技術的に小規模の経営でも十分に生産を上げることができ、しかも当時の小農にとって、米よりも収入が高く、換金作物としての魅力が大きかったことが指摘できる。そして中国人の仲買人がいたことも市場へのアクセスを助けているといえよう。イギリス植民地政府は、マレー人小農は食料生産に従事すべきと考えており、政策的にもプランテーションに優遇し、小農のゴム栽培の申請に対しても消極的であった。また 1920 年代初めにゴムの市場価格が下がってゴム生産国が割当制を設定した際に、小農の生産割当分を低く設定したり、イギリス植民地政府はさまざまにプランテーションを優遇している。

ここで強調しておきたいのは、そうした植民地政府による小農への食糧生産の奨励やゴム栽培におけるプランテーションの優遇がありつつも、マレー人は自給自足的な生産維持部門にのみ滞留したのではなく、小農として換金作物へのアクセスを維持していったことである。また、鉱山やエステートでの賃労働を選択しなかったのは、歴史的に作り上げられた神話のように「マレー人は怠け者」だからではなく、当時の労働条件からすれば、きわめて合理的な選択だったのである。

## (2) 錫鉱山の中国人労働者

他方、鉱山の場合、中国人資本家が中国人労働者を過酷なまでにこき使うが、そこには中国人社会の地縁血縁「幫（パン）」の関係が利用される。すなわち同じ地縁血縁で縛り付け、賃金もエステート内で食料や阿片代などでピンはねをして、逃げ出すと連れ戻す、という当時の状況は、中国資本による労働者の独占支配の状況であり、イギリス資本が錫産業に参入できなかった要因ともなった。しかし英領植民地政府が労働者に対するそうした拘束を禁止していく一方で、中国人クーリー自身もそうした束縛から解放され始め、またイギリス資本がマラヤに浚渫機を導入した1912年以降、資本と技術の力で中国人が抑えていた錫産業にイギリス資本が参入してくる。中国人資本が支配していたマラヤの錫鉱業において、1912年以降はイギリス資本が取って代わっていったのは、その技術力と資本力によってであるが、その際には、中国人労働者が賃金労働者としてイギリス資本の下で自由に働けるようになったこともポイントともなっている。

## (3) ゴム・エステートのインド人労働者

またゴム・プランテーション産業では、同じイギリスの植民地であるインドから労働力を導入している。当初、プランテーション労働者の労働条件は過酷なものであり、そのため、死亡率もかなり高かった。また当時の記述を見ると、白人に対するインド（タミル）人の服従は痛々しいほどに絶対的である。

そもそもイギリス資本がプランテーションを開いた当初は、マレー人小農が賃金労働者として働くことをイギリス人は期待したが、マレー人は先に挙げたように小規模ながらも自分でゴムの栽培をすることを選択した。また、錫鉱山で働いている中国人労働者についてはリクルート経路もマラヤ内においても中国人社会の拘束が大きく、ヨーロッパ人プランテーションが多数の労働者を雇用できる見込みはなかった。そのため当初はプランテーション相互の労働者の引き抜きが盛んで、プランテーション経営者は引き抜きによる賃金水準の上昇をおそれ、安定した労働力供給を求めた。そして、インドからの出稼ぎの奨励にインド人移民基金が設立され、ゴム・プランテーションの発展と維持に大きな役割を果たすこととなった。またインド人労働者のリクルートとして、カンガニー・システムや契約労働（年季奉公）があげられるが、カンガニー・システムは、マラヤのプランテーションに雇われたリクルートエージェント、カンガニーがインドに行き、賃金を前払い（後で賃金から引かれる）して、エステートに連れてくるシステムだが、その搾取的な性格から本

国インドでの批判も多く、インド政府の規制もあって、後に禁止されるようになる。

## 5 「自由な賃労働」

こうした労働力の支配と従属という構造は、資本と労働という階級概念のみならず、「賃労働」とは何か、という議論にまでつながるものであり、当時の労働者の置かれた位置や政府の政策も研究の対象に含めていくことになる。

マルクスのいうところの「自由労働 (free labour)」<sup>7)</sup> の概念から考えるならば、「生産手段からの自由」(土地所有の有無)のみならず、「自らの労働力を売る自由」すなわち「身体の自由」についても議論をすることが重要である。すなわち、当時の中国人労働者やインド人労働者は決して自由ではなかったし、マレー人が錫鉱山やゴム・プランテーションで働かなかったのは当時の労働条件からすれば合理的な判断であった。

「二重の意味で自由な賃労働者」という労働者像は、「自らの労働力を売る自由」が完全な形では保障されているとは限らない植民地時代には、実は描きようもないのである。その点、Robert Miles (1987) のいうところの「不自由な賃労働 (unfree wage labour)」といった視点からの議論でみると、中国人社会の地縁血縁「幫 (パン)」の関係やカンガニー・システムや前借契約制度といった契約制度でがんじがらめの不自由な形で労働に従事させられるものの、奴隷制度ではない賃労働の形態を考えることができるようになってくるのである。

マレー系の賃金労働者については、1970年代以降の急速に近代部門に参入してきたマレー系労働者、とくに電子産業などに大量に雇用されるようになったマレー系の女性工場労働者が議論の対象となるが多かった。しかし、英領植民地時代にもマレー人の賃金労働者は錫鉱山、ゴム・エステートにおいて一定数、存在していたし、独立以降もエステートなどで働くマレー系労働者<sup>8)</sup>もいたのだが、議論の対象となることは少なかった。

1970年代以降、労働市場の状況は大きく変化し、賃金労働者の状況も変わることとなった。

マルクスの『資本論』の概念からするならば、自由な賃労働者への転化は、「生産手段の一部分である(身体の不自由のない)奴隷や農奴」からならば解放であるし、「生産手段を持つ自営農民」からならば転落である(本源的蓄積期における抵抗運動は後者によって担われる)。

しかし、マレーシアの1970年代以降の経済発展において、若者は次第に「給料

をもらう会社勤め」という生活スタイルを選好し始め、1980年代後半からは職種の選り好みが増え激しくなってくる。農村部では若い世代の離農志向が見られ、1970年代にマレー系がエステートに労働者として参入してくるが、1980年代には早くもエステートは3K職場として忌避され、外国人労働者が導入されるようになっていのである<sup>9)</sup>。

そうした社会の変化を考えると、賃金労働者という概念だけでは、給与所得者としてのホワイト・カラーや技術・専門職といった労働者と、工場やエステートの労働者との性格の違いや労働市場の位置付けの違いなどは議論できない。やはり、そこには階級に加えて、社会階層の視角も必要となってくるのである。

## 6 ジェンダーと「作業」

ジェンダー（性差）についても、国際労働力移動における「出稼ぎの当初は男性が多いが、次第に女性も増えてくる」といった一般的な移民のパタンの分析だけでなく、「労働や作業の性質」という点でも議論をすることが必要である。

たとえばエステート（プランテーション）の仕事や作業というと、炎天下の男性の肉体労働をイメージする。しかしながら、確かにジャングルを切り開いたり、重い収穫物を運んだり、といった作業ならば男性向けの作業かもしれないが、ゴムのエステートにおけるタッピング作業は女性もできる作業である。

ゴムのタッピング（樹液集め）は、ゴム樹の幹の樹皮をナイフで浅く切り、幹を伝ってタッピングカップに落ちてくる樹液を集めて回る作業であり、ゴムのエステートにおける中心部分を占めている。樹皮を深く切ってゴム樹を傷つけてもいけないし、樹皮を幅広くはいでしまっても樹全体の樹液の収穫量が減ってしまう。タッピングは熟練度を要する半熟練作業に分類できよう。しかし、カップから樹液を集める作業ならば子どもでも手伝うことができるし、肥料や消毒薬の散布といったスプレイの作業は不熟練作業に分類できよう。いずれにせよ、ゴム・エステートにおける作業においては、女性が従事できる作業が中心部分を占め、実際にタッパーやスプレーヤーとしてエステートの労働力には女性も多く含まれていた。

他方、オイル・パームのエステートでは、重い実の収穫作業や積み上げ・運搬作業などの男性向きの力仕事（肉体労働）が作業の中心であり、女性の仕事は除草作業や農薬・肥料の散布などの作業にかぎられてくる。そのため、マレーシア各地のエステートにおいて、ゴムからオイル・パームの植え替えが進んでいく1970年代以降、エステート部門における労働力において女性の比率は急速に減っている。こ



うしたゴムからオイル・パームへの転換によって、男性・女性の作業の分担やエステート部門における労働構造も変化してきた<sup>10)</sup>。

このように、単に植民地時代のクーリー作業といっても、不熟練の労働と分類されても作業はさまざまであり、不熟練労働が自動的に男性向けとはならないのである。こうした視点から、当時の女性労働者の仕事や生活、それから労働者としての労働市場における位置づけなどを捉え直すことは重要である。

また1970年代以降の電子・電機産業、繊維・衣服産業における女性の大量雇用については、すでに多くの研究者によって議論されている<sup>11)</sup>。多国籍企業が女性労働を選好する理由としては、①女性の賃金水準が低い、②新卒が豊富に供給される、③就業年数が比較的短く雇用調整が容易、④女性は指先が器用、⑤視力がいい、⑥辛抱強い、⑦従順、などが「女性労働独自の性質」として挙げられる。①から③は、労働市場における女性の位置付けに関係しており、男性を世帯の主要な稼ぎ手とする前提から、女性の就労や収入は補助的なものでいいとして、女性の賃金水準は正当化される。また④に挙げられる「器用な指先」は、生物学的な遺伝に由来するものでなく、女性の役割に適しているとみなされる仕事について、母親や女の親族によって幼児期から受けてきた訓練の結果である。そのため、女性の「技術」や「熟練」は家事サービスと同様に支払いの対象とならず、労働市場では不熟練労働者として扱われるのである<sup>12)</sup>。

さらに、現在のマレーシアで、相対的に低賃金で労働条件も劣る（いわゆる「3K」的）不熟練労働の業種・職種は外国人労働者に依存しているが、出身国（インドネシア、バングラデシュなど）によって外国人労働者の学歴なども異なり、就く業種も異なっている。ジェンダーにしても、男性が建設業やプランテーション業の肉体労働に従事するのに対して、女性は家政婦の職種もあり、とくにフィリピン人女性は家事サービス業に集中している、といったように違っており、外国人労働者が集中している不熟練労働もセグメント（断片）化しているのである。

ジェンダーの議論は歴史研究においては相対的に新しく、歴史的に議論しようとする一次資料も少ない場合も多いが、無視できない視点である。

## 7 おわりに：歴史の捉え直しの試み

このように、エスニック集団による分業状況、ジェンダーによる部門や業種の違い、そして外国人労働者の導入される職種・業種などを分析することによって、現代の労働市場におけるセグメンテーション（断片化）の構造が示されるが、それは

19世紀半ば以降の錫鉱山やゴム・プランテーションの労働者として入ってきた中国人やインド人の議論をふまえて初めて構造的に見えてくるはずである。その際にはとくに「労働者」としての分析が中心に置かれるべきであろう。

またそうしたマレーシアの「労働者」の変化と並行して、労働運動の動きも捉えていく必要がある。

マレーシアの労働運動は、ゴム・エステートの労働者の労働組合運動が中心的役割を果たしてきた<sup>13)</sup>。すでに述べたように、歴史的にゴム・エステートの労働者はインド系が中心であった。そのため、マレーシア労働組合評議会（MTUC）もインド系の会長やスタッフが中心であったが、近年はマレー系の会長が選出されるなど、状況も変わってきている。労働組合については、日本と同様に、組合加盟率の低下などの面も含めて、その存在意義と運動の組織力については、それほど力はないとして疑問視する論者もいる。しかし政府は、労働問題の政府と労使の三者会談には雇用者団体とともに、労働者の代表としてMTUCの出席を求めており、一定の位置付けは認められよう。

また階級やエスニシティの観点から、労働を分析することは重要であり、歴史を見ると、こうした階級関係とエスニシティやナショナリティの関係が二重構造となっており、その構造の分析は当時の社会構造の分析ともつながってくる<sup>14)</sup>。また1980年代以降の新しい中間層の台頭など、社会階層としての分析も不可欠である<sup>15)</sup>。

「エスニシティ、ジェンダー、ナショナリティ」という観点は、従来の歴史研究ではしばしば見過ごされてきた点である。こうした分析視角を中心に置き、同時に、労働者の仕事の「作業の質」（不熟練・熟練、業種・職種の違いなど）や「賃金雇用」という点から、労働者として移住労働者を分析する。これは、筆者自身が現代マレーシアにおいて議論してきたテーマからマラヤ経済を捉え直し、通史として位置づけることであり、まだまだ課題として残されていることも多い。しかし、現代マレーシアの労働力構造の分析において自分なりに議論してきた視点を、植民地時代に向け、文献や史料の読み直しを進めると、マラヤ（マレーシア）経済が新たな側面をあらわすようで、歴史研究の面白さを感じる。これは自分なりの歴史の捉え直しの試みなのである。

## 注

- 1) 本研究は、文部科学省の科学研究費補助金（2003-2006年度）による基盤研究（C）「マラヤ／マレーシアの経済発展における『労働者』に関する分析と検討」（課題番号

15530193) の研究成果の一部である。

- 2) 本稿は、研究の視角を論じるための試論であることをご了承いただきたい。
- 3) マレーシアは、2000年の人口センサスによると、人口2,327万人、マレー系66%、華人(中国系)25%、インド系8%、その他1%となっている(Malaysia (2001), Table 4-1, p.89)。ただし、人口には市民権のない者も含まれているが、エスニック比率はそれを含めずに計算している。
- 4) マレーシアのエスニシティについては、吉村真子(2004)を参照されたい。
- 5) マレーシアにおける外国人労働者の導入や認可登録の過程については、吉村真子(1998)の第1章第3節「マレーシアにおける労働力不足と外国人労働力」、また工場のバングラデシュ人労働者、エステートのインドネシア人労働者のケースとして、同書の第3章、第5章で論じている。
- 6) 1997年通貨危機の影響と外国人労働者については、吉村真子(2003b)で扱っているので省略する。なおマレーシア経済における通貨危機の影響については、Jomo ed. (2000), Ishak Shai et al. (1999), 小野沢純(2000), 吉村真子(2003b)を参照されたい。
- 7) マルクスによる「自由労働」の概念については、『資本論』第4章第3節および第24章第1節を参照されたい。
- 8) Wan Zawawi (1998)は、1970年代の東海岸トレンガヌ州のオイル・パーム・エステートの調査からマレー系労働者のプロレタリア化の背景や意識、エステートにおける生活や仕事、ストライキや組合運動について論じている。同書については、吉村真子(2000a)を参照されたい。
- 9) 吉村真子(1998)、第5章「マレーシアのエステートと外国人労働者」のケース・スタディを参照されたい。
- 10) エステートにおける労働力構造と作業におけるジェンダーの構造については、吉村真子(2001)を参照されたい。
- 11) 電子産業の女性工場労働者に関する議論については、吉村真子(1998)の第4章「マレーシアの工業化と女性工場労働者」で詳しく扱っているので省略する。
- 12) 吉村真子(1998), 133頁。
- 13) マレーシアにおける労働組合については、Gamba (1962), Ramasamy (1994), Jomo and Todd (1994)などがエステート労働者の労働組合について議論している。
- 14) マラヤ/マレーシアの経済史を階級関係で分析した研究として代表的なものは、Jomo (1986)であろう。また、マレーシアの階級関係とエスニシティを議論したものとして、Syed Husin Ali ed. (1984), Hua Wu Yin (1983)などが挙げられる。
- 15) マレーシアの新しい中間層については、Abdul Rahman Embongらが社会学の視点から分析を行っている(吉村真子(2000b))。

《参考文献》

- Anasaram, Sinnappah (1970), *Indians in Malaysia and Singapore* (Kuala Lumpur : Oxford University Press).
- Francis Loh Kok Wah (1988), *Beyond the Tin Mines: Coolies, Squatters and New Villagers in the Kinta Valley, Malaysia, c. 1880-1980* (Singapore : Oxford University Press).
- Gumba, Charles (1962), *The National Union of Plantation Workers: The History of the Plantation Workers of Malaya 1946-58* (Singapore : Eastern University Press Ltd.).
- Hing Ai Yun et al. (1985), "The Development and Transformation of Wage Labour in West Malaysia," *Journal of Contemporary Asia*, Vol. 15, No. 2.
- Hua Wu Yin (1983), *Class and Communalism in Malaysia: Policies in a Dependent Capitalist State* (London : Zed Books).
- Ishak Shari (2000), 'Economic Growth and Income Inequality in Malaysia, 1971-95,' *Journal of the Asian Pacific Economy*, Vol. 5, No. 1/2.
- Ishak Shari et al. (1999), 'Social Impact of Financial Crisis: Malaysia.' Report submitted to the United Nations Development Program, Kuala Lumpur (unpublished).
- Jackson, R. N. (1961), *Immigration Labour and the Development of Malaya, 1786-1920* (Kuala Lumpur : Government Printers).
- Jain, R. K. (1970), *South Indians on the Plantation Frontier in Malaya* (Sydney : University of New England Press).
- Jomo K. S. (1986), *A Question of Class: Capital, the State, and Uneven Development in Malaya* Singapore : Oxford University Press.
- Jomo K. S. (ed.) (2000), *Malaysian Eclipse: The Economic Crises of 1997-98* (London : Zed Books).
- Jomo K. S. and Patricia Todd (1994), *Trade Unions and the State in Peninsular Malaysia* (Kuala Lumpur : Oxford University Press).
- Jones, Sidney (2000), *Making Money Off Migrants: the Indonesian Exodus to Malaysia* (Hong Kong : Asia 2000 Hong Kong and CAPSTRANS Wollongong).
- Malaysia (2001), *Eighth Malaysia Plan 2001-2005*, Percetakan Nasional Malaysia Bhd., Kuala Lumpur.
- Means, Gordon P. (1972), "Special Rights as a Strategy for Development: The Case of Malaysia," *Comparative Politics* (October).

- Miles, Robert (1987), *Capitalism and Unfree Labour: Anomaly or Necessity?* (London: Tavistock Publications).
- Muhammad Haji Muhd Taib (1996), *The New Malay* (Petaling Jaya: Visage Communication).
- Ragayah Haji Mat Zin, Lee Hwok Aun and Saaidah Abdul-Rahman (2002), 'Social Protection in Malaysia,' in E. Adam et. al. (eds.) (2002), *Social Protection in Southeast and East Asia* (Singapore: Friedrich Ebert Stiftung).
- Ramasamy (1994), *Plantation Labour, Unions, Capital, and the State in Peninsular Malaysia* (Kuala Lumpur: Oxford University Press).
- Syed Husin Ali ed. (1984), *Kaum, Kelas dan Pembangunan/Ethnicity, Class and Development Malaysia* (Petaling Jaya: Persatuan Sains Social Malaysia).
- Wan Zawawi Wan Ibrahim (1998), *The Malay Labourer: By the Window of Capitalism* (Singapore: Institute of South East Asian Studies).

小野沢純 (2000) 「マレーシアの経済危機への対応と課題」『アジア経済危機と各国の労働・雇用問題：模索する改革の方向』第2章，日本労働研究機構。

堀井健三編 (1989) 『マレーシアの社会編成と種族問題：ブミプトラ政策20年の帰結』アジア経済研究所。

吉村真子 (1998) 『マレーシアの経済発展と労働力構造：エスニシティ，ジェンダー，ナショナルリティ』法政大学出版局。

吉村真子 (2000 a) 「書評 Wan Zawawi Wan Ibrahim, *The Malay Labourer: By the Window of Capitalism* (Singapore: Institute of South East Asian Studies, 1998)」『アジア経済』第41巻第2号，2000年(2月)。

吉村真子 (2000 b) 「クアラルンプルの就業構造と社会の変容」生田真人・松澤俊雄編『アジアの大都市 [3] クアラルンプル/シンガポール』第7章，日本評論社。

吉村真子 (2000 c) 「マレーシアの経済発展と外国人労働者：エステートのインドネシア人労働者」森廣正編『国際労働力移動のグローバル化：外国人定住と政策課題』第6章，法政大学出版局。

吉村真子 (2001) 「マレーシアのプランテーションにおける労働と『男性性』：プランテーションの労働構造と作業の質」『社会志林』第48巻第2号，2001年(12月)。

吉村真子 (2003 a) 「アジアの女性移住労働者」『アジア新世紀 第5巻 市場』第1章，岩波書店。

吉村真子 (2003 b) 「マレーシアにおけるソーシャル・セーフティ・ネット」『アジアのソーシャル・セーフティ・ネット』第6章，勁草書房。

吉村真子 (2004) 「マレーシアにおけるエスニシティと社会：グローバリゼーションにおけ

る多民族社会」『社会志林』第50巻第3号（1月）。